

## 街角広場の掲示板と主

「ひがしまち街角広場」の赤井直さんの一日は掲示物の整理から始まる。終了した行事や案内のチラシをはがし、レイアウトを微調整する。新しく届いたポスターがあれば、内容を見て壁を眺め、幾つかのチラシを移動してバランスよく貼り付ける。必要があれば古くなった掲示を作り直したり、自分でメッセージを書いて加えたりすることもある。

簡単な作業のように見えるが、街角広場の掲示物を見ていると、新千里東町と千里ニュータウンの市民活動の今がわかる。千里の町が生きていること、変化していることがわかる。のみならず、何度か訪問するうちに、日々この掲示板を目配りし整えている人がいることに気づく。この場所には主あしというべき人がいることをはっきり感じるのである。

簡単な作業のように見えるが、こうしたメンテナンスができてない掲示板は多い。とうに期限の過ぎたポスターが残っている掲示板、いつになっても新しい掲示物が増えない掲示板、色あせて破れかけた注意書きがいつまでも交換されない掲示板など。

# 千里の再構築に向けて — 誰が主となるのか

鈴木 毅 *Written by Takeshi Suzuki*



ひがしまち街角広場

誰でもふらっと訪れ、お気持料100円でお茶やコーヒーを飲める居場所であるのみならず、地域の情報交換の場、コミュニティ活動の拠点でもある。写真は1周年イベントの時に大学の研究を発表させていただいた時のもの。当時はまさに街角にあったが、現在は諸般の事情で移転している

これらは情報源として役に立たないだけでなく、そのスペースを見守っている人がいないことを浮き彫りにする。責任者・管理者の存在や意思を感じられないこうした掲示板は、周囲に殺伐感、無力感、不安感を漂わせ、犯罪の遠因にもなる。

千里ニュータウンの課題は、街角広場の掲示に対する赤井さんのような役割を、今後誰が担当するのかということである。

かつてその役割は間違いなく大阪府が担ってきた。

千里の開発記録映画「ひらけゆく千里丘陵」など当時の資料を見ると、開発者としての誇りと並々ならぬ自信を読み取れる。実際、千里ニュータウンはそれに値するプロジェクトであった。この誇りはどこにいったのだらう。

案内できる場所がない

時は経て、時代は持続社会、「千里はどうしていますか？」と全国から専門家がやってくる。残念ながら自信をもって案内できるところはない。千里のその後を期待してきた人々を案内したいところは本当にないのである。

住民活動は非常に活発である。ユニークなNPOも沢山ある。集合住宅の建て替えも進んでいる。しかし、建て替えを実現した関係者の皆様のご努力には頭が下がるのだが、建て替えの結果はほとんどが板状の高層マンションであり、「実験都市」千里に相応しいような、今後に向けての提案性ある事例はないといっている。世界中の都市がアイデアを競いあっている積極的なリノベーション、コンバージョン(用途変更)も皆無に等しい。

そういうわけで、お客さんを案内するのは、結局、いつも新千里東町の「ひがしまち街角広場」ということになる。「存知の方も多いと思うが、国の「歩いて暮らせる街づくり構想」モデル事業によって平成13年に誕生し、その後住民の自主運営によって今日まで続いてきたコミュニティ・カフェである。

近隣センターの空き店舗を利用した手作りの小さなスペースが、いつでも誰でもふらっと立ち寄って時間をつぶせる日常の居場所として、世間話から都市計画まで様々な地域の情報交換の場として賑わい、さらに幾つものコミュニ

ティ活動の母体・拠点となっている様子を見て、目を見張らなかつた専門家はいい。運営の中心である赤井さんの「千里に住み始めた時からこういう場所が欲しかった」という言葉に対して、建築・都市の専門家であるはずの私たちは先輩に代わって、ただうなだれるしかない。

再生ではなく再構築

街角広場で、赤井さんはじめ住民の方々からお話をうかがっていて認識したのは、「ニュータウンにも歴史がある」ということである。

江戸時代の新田集落である上新田の土地に、大阪府によって開発されたこの先進的な住宅地を、住民たちは少し戸惑いながらも使いこなしてきた。生活を楽しむ、自治会や地域行事を創り上げ、当初の計画で不足していた文化施設等を要求・実現し、駐車場や建替問題で住環境に働きかけて千里を故郷にしていた。

吹田市、豊中市の住宅地管理や自治会活動の考え方の違いもあり、教科書で読んだ時は均質にしか見えなかつた12の近隣住区は、各々個性をもった社会環境として成熟している。ニュータウンにも確実に歴史が刻まれているのである。

大阪大学の同僚の木多道宏先生や学生が調査分析した、こうした千里の住民の町への働きかけの歴史を、吹田博物館と豊中市立千里公民館で2006年に開催された千里ニュータウン

展において展示したところ、多くの住民の方々が懐かしそうに見てくださった。

ニュータウン再生が叫ばれているが、この既に短くない千里の歴史の重みを考えると、再生というより再構築というほうが相応しいと私は考える。再生には、元通りにする、衰退したから昔の繁栄を取り戻そう、夢よもう一度的なニューアンスがどこかつきまとっている。それは、今日までの歴史の積み重ねをなかつたことにしてしまう危険性がある。

ちよつと赤井さんが、街角広場の壁の掲示を見て判断し再構築しているように、既にある町の構造の特徴や資産をきちんと評価し再編成していくこと、単に古くなったから建て替えるのではなく、資産を評価しつつ、少子高齢化や人々の価値観や社会の目標の変化に対応して、ニュータウンの環境や社会を再編成・再構築することが千里の課題なのである。

変わり難く、変わり易い町

千里を見ると、再構築を考える上でニュータウン特有の問題があるように思う。一言でいえば、ニュータウンは「変わり難く、変わり易い」構造の町なのである。

まず、変わり難さについて説明する。最近、若い人達が空き店舗などを利用して新しいタイプの空間を運営し、町に働きかける試みが増えている。大阪でいえば空堀や中崎町が良い例

だが、こうした創意をもった個人オーナーによるわずかな軒の新しいタイプの店やスポットができることによって、町の雰囲気や活気は大きく変わらう。

これがニュータウンでは起こり難いのである。というより「そうならないように造られている」。ご存知のようにニュータウンは機能でゾーニングされている。緩和傾向にはあるが、住宅地の中に商業や業務を混ぜないのが原則である。また、集合住宅地はさらに難しく、近隣センターも分譲されているため新しいオーナーは入り難いのである。タウン誌のマップを見ればわかるが、北摂地域の中で千里ニュータ

ウンは、気の利いたレストランやショップの空白地帯となっている。

街角広場がこれだけ受け入れられているのに、お茶だけでなく、「コミュニティ・レストランや配食サービスや託児スペースもやりたい意欲があるのに、それが可能なスペースが全く展開できない状況である。

店やレストランは、単に商業施設、飲食施設というだけでなく、個人のアイデアを生かし、サービスや交流の場を提供して社会に働きかける一番手っ取り早い活動であり、こうした試行錯誤の集積こそが町を便利で豊かに発展さ

せていく大きな原動力である。現在の千里ニュータウンでは、この力が封じられている。住民や個人にいくらアイデアがあっても町が変わりにくい構造になっているのである。

逆に風景が「変わり易い」のもニュータウンである。千里の絵葉書を作る活動(千里グッズの会)をしているが、数年前に撮った写真が歴史的記録になってしまっただけで、最近の千里の風景の変貌は激しい。普通の市街地ならば、大規模の地上げでもない限り土地や建物の大きさは継承され、建て替えてもどこか以前の面影が残るものだが、府営、公社、公団などの単一主体による集合住宅地の敷地のロットの大きさと、か

第 期 (1966~1975年)



第 期  
OS内はプレイロットやコートがあり広い  
居住者同士の交流が盛んであった  
維持管理は居住者自身で行われていた(OS内の草刈、階段室周りの掃除)

第 期 (1976~1985年)



第 期  
集合住宅の増築が起こる  
OS内に駐車場が増設される

第 期 (1986~1995年)

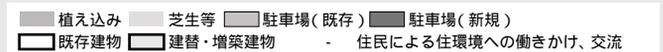


第 期  
駐車場がさらに増設  
子供世代の多くが転出しプレイロットが使われなくなる  
OSの草刈を業者に委託し階段室の掃除だけ続けている

第 期 (1996~2005年)



第 期  
視線を確保するためにOSの植え込みが刈り取られた  
OS外側の住棟の足元に居住者が植栽を置き始めた



東町府営住宅の住環境の変容(下渡純司による)  
大阪府がコミュニティのために選択した囲み型配置。当初は、狙いどおり砂場遊びやバレーボールなど様々な活動の場だったが、駐車場の設置や一部増築によってその性格が変わっていった。日本では珍しいこの囲み配置であるが、建て替えの計画にあたって考慮された形跡はない



**ニューディール・カフェ**  
1994年に試験的にオープン。現在はルーズベルトセンターにあり、レバノン料理のシェフが主になってコミュニティの場とビジネスを両立させている。ほぼ毎日ミュージシャンの演奏がある。街角広場の写真を見て「うちと同じだ」「シスター(姉妹)・カフェだ」と言ってくれた



**グリーンベルト・ミュージアム**  
建設時の住戸をそのまま使ったコミュニティミュージアム。ボランティアは当時の生活と歴史を誇りと情熱をもって説明してくれる。家具や電気製品も住民から収集された当時のものがしつらえられている。寝室にはタイロン・パワーの写真が飾られていた

つての住棟配置とは全く異なる形態への建て替えによって、思わず「ここはどこ?」というくらい根こそぎ風景が変わってしまつ。今やとても統一的に計画・開発された町とは思えない。千里は、府や都市機構という公共主体による計画的開発によって整ったインフラと住環境の町となった反面、公共主体が動かない限り変化しない町、公共主体の方針次第で簡単に変化してしまう町になっている。大規模敷地の所有者である府や都市機構の責任は極めて大きい。

## アメリカに学ぶこと

昨年ワシントン郊外のグリーンベルトの町を調査する機会があった。ここはニューディール政策によって開発された住宅地の一つである。専門家スタッフ40名あまりを率いて町全体を管理するGHI(グリーンベルトホームズ)

にとつて重要な場が90年代半ば以降に誕生している。感心するのは、これらが地域新聞への投書やカフェでの会話など、少数の住民の発意がきっかけとなり、行政の支援を得て具体的な活動や施設として実現している点である。

今や日本の各地にもできてきているドッグランも、もともとはニューヨークの犬の飼い主の願いが発端で、犬同士が遊べる場として全米の公園に普及したものである。個人のアイデアや思いを育て実現してしまう社会の柔軟さ・力強さという点でアメリカに学ぶべきところは大きい。

建て替えができない住宅地が沢山ある中で、千里は建て替えができるだけで良い、としなければという声を聞くことがある。しかし現状の再開発は、どう見ても、立地と住環境という過去の資産の切り売りにしか見えない。大阪の宝であり、大阪をアピールできる千里ニュータウンをただ切り売りするのはあまりにもつたいない。グリーンベルトでうらやましかったのは、自分たちのアイデアで町が確実に良くなっていく

の組織など興味深いことばかりだったが、町の再構築という点で印象に残ったのは、近年になつても新しい場所やサービスが次々に生まれていることである。街角広場のようなニューディール・カフェ、地域歴史館であるグリーンベルト・ミュージアム、ファーマーズ・マーケットなど、地域

実感をもっていることである。繰り返すが、千里に住民のアイデアとパワーは十分あるが、それによって町の環境が実際に進化する体制にはなっていない。大阪府、吹田市、豊中市、都市機構は、ぜひ責任ある大家・主<sup>あかし</sup>らしくふるまい、市民に活動できる空間と仕組みを設定してほしい。そして、国内外から千里を訪れる人々に向かって、20世紀の高度成長期に日本の総力をあげて建設された千里ニュータウンは、時代の変化に相応しい形でこのように成熟・発展しましたと胸をはって案内できる都市であってほしい。

### 参考文献

- 「日々の実践としての場所のしらえに関する考察 ひがしまち街角広場を対象として」田中康裕他「日本建築学会計画論文集」2007・10
- 「千里ニュータウン新千里東町における住環境変容と居住者の住まい方の経年変化に関する研究」下渡純司「大阪大学修士論文」2007・3
- 特集「生活環境のリストラクチャリング」建築雑誌 2005・5
- 「コミュニティを媒介するカフェとファーマーズ・マーケット」田中康裕 若林可奈子(OIC No.41) 2009
- 「主がしつらえる地域の場所に関する研究」田中康裕「大阪大学博士論文」2006
- 「千里ニュータウン近隣住区における住環境運営のしくみが見た社会空間構造の変容について」柱健太郎「大阪大学修士論文」2004・3
- ( )「グリーンベルトの調査は、国土交通省の、平成20年度住宅・建築関連先端技術開発助成事業」より助成を受けて実施した。

### □ 鈴木 毅(すずき たけし)

大阪大学工学部地球総合工学専攻准教授。1957年生まれ。80年東京大学工学部建築学科卒業、87年同大工学部課程修了後、88年同大助手。97年大阪大学工学部助教授。研究分野は、都市の場所と人の居方に関する研究など。主な著書は、『環境と行動』(共著、朝倉書店)、『建築計画読本』(共著、大阪大学出版会)など。